

I 総括

平成12年から始まった介護保険制度は10年が経過し、この間の社会経済状況の変化の中で、介護や保健・医療等のサービス基盤の強化に向けた施策が様々行われてきた。現在国では医療や看護、介護や生活支援サービスが切れ目なく提供される地域包括ケアシステムの実現を目指し、24時間対応の定期巡回・随時対応型のサービスを始めとする医療と介護の連携強化、認知症対策の推進、介護人材の確保とサービスの質の向上等を内容とする介護保険法の改正案が4月には国会に提出されており、今後の検討状況を注視していく必要がある。

こうした状況の中、当事業団においても、区民の方々がいつまでも地域で安心して在宅生活を継続できるよう様々な取り組みを行ってきた。

平成22年度の重点取り組みのひとつである認知症ケアについては、デイ・ホーム太子堂で4月より若年認知症コースを開始し、安心して社会参加できる場を提供するとともに、家族会の立ち上げに向けた支援に取り組んだ。世田谷区福祉人材育成・研修センターでは単発的に行われていた認知症ケア研修を事例検討も含めて体系化し8日間にわたる研修に延べ942人が受講するなど認知症ケアの充実に力を注いできた。

また、先進的な取り組みとして、モデル事業にも取り組んだ。デイ・ホーム上北沢では上北沢ホームと協力して、高齢者が在宅生活を継続し、地域で暮らし続けることを支援するため、通所介護サービス終了後の午後10時まで延長してサービスをご利用いただく世田谷区高齢者トワイライトステイモデル事業を平成23年2月より開始している。上北沢ホームでは在宅要介護高齢者の家族、介護支援専門員、サービス提供責任者等からの介護に関する相談に随時対応する相談事業「かみきた介護サポート」を独自に平成22年11月からモデル事業として実施し、家族からも大変好評を得ている。また、在宅では訪問看護師と介護職が同じ時間に利用者宅を訪問する同行訪問や時間差で訪問し連携を図るモデル事業に取り組む利用者の安全やケアの充実等の評価を行っている。

また今後も急速に高齢化が進む中、一人暮らし高齢者や高齢者のみ世帯の増加とともに、認知症高齢者も増加する中で、あんしんすこやかセンターでは認知症サポーターの養成や見守りネットワークの構築等支援の必要な高齢者を地域で支える仕組み作りに積極的に取り組んだ。

さらに、各事業での取り組みについての研究などを様々な機会で発表した。芦花ホームは「口からおいしく食べる」を目標として歯科衛生士・介護・看護職等が連携して取り組んだ口腔体操について、日本老年歯科医学会で発表を行い、会場からは介護職の取り組みについて高い評価を受けた。上北沢ホームは「アクティブ福祉 in 東京」において、2事例を発表し、地域への貢献・交流を目的としておこなった「車いす体験してみませんか」は東京都福祉保健局長賞を受賞した。これらに加え、事業団として初めて「事業団内事例研究発表会」を2日間にわたって開催し、それぞれが取り組んだ研究や成果を共有し自己啓発を図った。発表会には多くの職員の他、関係機関や利用者家族の方も参加され、職員の意欲増進につながった。

一方経営状況は、単独型のデイ・ホームやあんしんすこやかセンターは大変厳しい状況であったが、訪問看護や訪問介護等の利用が増加したため、経常収支は黒字となった。しかし事業団を取り巻く環境は今後も厳しい状況が予想されることから様々な工夫や効率化を図り経営の安定化を図っていく必要がある。

今後も事業団は、区民が住み慣れた地域社会で人生最期の時まで尊厳を持って安心して生活できるよう支援するとともに、地域から頼られる社会福祉法人を目指した事業運営を行っていく。

また、3月11日に発生した、未曾有の大被害をもたらした東日本大震災では、当事業団は利用者や職員に怪我等はなかったものの、事業所内のエレベーターが停止したり、電話などの通信手段が利用できなくなり、各施設の状況をスムーズに把握することが困難であった。今後、体制の整備に取り組み、こうした災害時にあっても、利用者や区民の皆様が少しでも安心して生活を継続できるよう、できる限りサービス提供の継続を目指していく。